

序 破 急



男子の中の男子

政府が今国会での成立を期す法案の一つに、個人情報保護法案がある。この法案に、新聞テレビ雑誌やジャーナリスト作家大学教授などの言論人・知識人が挙って反対している。表現の自由を脅かす悪法とし、この法案を「メディア規制法」「悪徳政治家保護法」と揶揄し悪態をつき批判している。その反対の急先鋒が、作家の城山三郎氏、七十五歳で、新聞、テレビに登場し、歯に衣着せぬ鋭い舌鋒で反対の弁を開陳している。物の怪にとりつかれたかのような悲愴感さえ醸す城山氏の批判には、『男子の本懐』の著者の重みも加わって、大いに説得力がある。聞く者は、この法案はそんなにひどい代物なのかと、ついうっかり城山氏の言説に乗せられそうになる。城山氏はこう公言する。

「この法案成立の暁には、「言論の死」の碑を建て、そこに賛成した全議員の名を刻む」

良心的で誠実、知的で正直者を体現したような城山氏の一步も退かぬ固い決意を前にすると、もはや誰もそれに反論できない雰囲気。誰かがただ黙ってしまおう。城山氏のこのキャラクターとこのなみなみならぬ決意を奇貨として、新聞やテレビは、「メディア規制法」反対キャンペーンの主役に、城山氏を祭り上げている。城山氏も畢生の仕事という趣でこの役柄に挑んでいる。

今時、城山氏のこの言動をとらえて、批判めいたことを言ったりすると、マスコミから集中砲火を浴び、袋叩きに合う。だから誰もが沈黙している訳だが、ここに、そうしたことを一切気にせず、ズバリ城山氏批判をやつてのけた、知勇の士がいた。「城山さんの言動はちよつと問題じゃないですか。こうした発言こそ言論統制じゃないですか。抗議すべきです。ボケているからあんな発言をなさるのでしょう」と反駁したという。自民党の同法案PRチームの会合で的一幕であった。そしてその発言の主こそ、われらが村上誠一郎衆議院議員（愛媛二区）であった。

この発言はすぐに新聞にスッパ抜かれ翌日には、天下が知るところとなった。しかし村上議員は、少しも動じるところがなく、『週刊新潮』の質問にこう答えている。

「私は城山三郎と司馬遼太郎の大ファンで、ほとんどの作品を読んでいます。『男子の本懐』はサイン入りの初版本を持つているほど。城山先生が具体的な根拠も示さずに法案反対を訴えるのを見て私はジャーナリストとして死んだと感じました。先生の発言自体が自由を弾圧するもの。先生は最初から結論ありきの報道番組で、久米のような軽薄な男に乗せられているだけ。愛読者として愕然としました。まさか本気で『言論の死』などと言っているのなら、今まで読んだ本を焼き捨てるばかりではありません。名声と業績とを無に帰すような先生の言動は、残念ですが、『ボケた』と理解する以外にないと思っています」

男子の中の男子の言である。城山氏はこれに「なんだか腹の立つことばかりでボケてるヒマなどないですよ」と反論したそう。